



いまやらねば いつできる わしがやらねば たれがやる

これは近代日本を代表する彫刻家「平櫛田中」の座右の銘です。田中は、90歳で文化勲章を受章しました。国立劇場のロビーには、田中の代表作「鏡獅子」があります。

「不老 六十七は はなたれこそぞう おとこざかりは百から百から わしも これからこれから」とも言っています。

100歳を超えて、30年かかってもしないほどの材木を所有していました。いつでも作品を制作できるようにと集めたものです。まさしく田中は生涯現役の人でもありました。

師走は、1年の終わりの月であり総じまいの意味の「仕極つ」が語源との説があります。「し」が仕事の「し」です。「し」の方は「果てる」の意味で、仕事じまいの月、つまり仕事が終わるという意味です。師走は、一年を反省する月です。

「充実した仕事ができただか。心を注げる仕事ができただか。

感謝の気持ちを持って仕事ができただか。肯定的で、積極的な思考で物事を判断できたか。そして、真摯たり得たか」等々。

「坂村真民一日一言」に「所思」があります。

「流れてさえおれば 水は必ず海に達する それと同じように 努力さえしておれば 所思は必ず遂げられる」というものです。

壁に掛かる残り1枚になったカレンダーに、来し方行く末を考えながら、ふと放浪の俳人「小林一茶」の句を思い出しています。

（これがまあ ついのすみかか 雪五尺）

江戸の生活を捨て故郷北信濃に定住する決意と、厳しい環境の中で暮らさねばならぬ現実とともに、雪の量と重さは未来への言い知れぬ不安を表しているようでもあります。

親しい仲間が集まって1年

の苦労を忘れるため、忘年会で繁華街に繰り出す人の波が最高潮になる時季です。この1年、忘れたいこと、忘れてはならない大事なことなどあったことでしょうか。浮世のうさなど、陽気に騒いですつきりと洗い流してしまいたいもの、日記に書かなくても思い出し、新年へあらためて心に刻む、そんな「望年会」を聞いてみる機会もよいのではないのでしょうか。

「年月は、人間の救いである。忘却は、人間の救いである。」大宰治の言葉です。忘れ去ることも時には必要ですが、肝心なことを忘れてほしくない、そんな師走です。



指宿市長
豊留悦男